

Speech and Interaction Integrated Language Activities Based on Task Based Language Teaching

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠宮, 広樹, 梅田, 晃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027943

TBLT をベースにした発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動

篠宮広樹 梅田 晃

(静岡大学教育学部附属島田中学校)

Speech and Interaction Integrated Language Activities Based on Task Based Language Teaching

Hiroki Shinomiya Akira Umeda

要旨

「『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動や複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていない」「児童・生徒は習得した知識や経験を活かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することが苦手である」、日本の外国語教育はこのような問題点を指摘されている。本校の生徒も「話すこと」に関して多くの生徒が苦手意識を抱いている。このため本稿では「生徒にとって魅力的な発表型タスク活動を課し、発表からやり取りへと移行する言語活動を設定することで『話すこと』におけるコミュニケーションを図る資質・能力を育成することができるのではないか」という仮説の下、「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し、そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」の育成を目指して取り組んだ実践的研究について述べることとする。

キーワード： タスク 話すこと やり取り ルーブリック パフォーマンス評価

1 研究目的

昨年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックを契機とし、国は学校英語教育に様々なメスを入れてきた。具体的には平成 25 (2013) 年 12 月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、目玉施策である小学校中学年における外国語活動の実施、小学校高学年における外国語教科化が令和 2 (2020) 年 4 月より開始された。また、平成 27 (2015) 年 6 月には「生徒の英語力向上推進プラン」が発表され、①生徒の英語力に係る国の目標を踏まえた都道府県ごとの目標設定・公表②「英語教育実施状況調査」に基づく都道府県別の生徒の英語力の結果の公表③中学校における英語 4 技能を測定する「全国的な学力調査」等が実施されてきた。

これらの取組により、CEFR A1 (英検 3 級程度) レベル相当の英語力を備えた中学生の割合は、平成 25 (2013) 年当時の 32.2%から令和元 (2019) 年には 44.0%に上昇するなど、一定の成果を上げてきたといえる。しかしながら、当初掲げていた同割合の 50%という目標値とはまだ大きな隔りがある。さらに静岡県における中学生の状況を見ると、令和元 (2019) 年度の同目標に対する達成率が 38.0%となっており、生徒の英語力が十分に向上していないことが明らかとなった(「静岡県英語教育改善プラン」2020)。

学習指導要領にも「授業では依然として文法、語彙がどれだけ身についたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないこと、『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動が十分でないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないこと」が学校英語教

育の課題として示されている。また「学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲が低下していること」「習得した知識や経験を活かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することが苦手であること」が児童生徒の課題として捉えられている(「中学校学習指導要領解説外国語編」2017)。このように、国が様々な施策を打ち出しながら英語教育改革に取り組んできたものの、状況は十分に改善されていないと捉えることができる。

本校においても同様の課題が見られる。本校の生徒は全般的に学習意欲が高いといえる。静岡大学 (2019) が行った調査によれば、現 3 年生の 71%、現 2 年生の 92%の生徒が「英語の学習が好きか」という質問に対し肯定的な意見を述べている(令和元 (2019) 年 12 月実施、5 件法)。全体的に知識が豊富な生徒が多く、CEFR A2 レベル相当の知識を備えている生徒も見られる。また、4 技能 5 領域の内「聞くこと」「読むこと」における英語力に長けている生徒が多い。一方で、「やり取り型」「発表型」に代表される「話すこと」や、既習言語事項を用いながらまとまりのある文章を正しく「書くこと」に関する力は必ずしも高いとはいえない。特に、話すことに関しては多くの生徒が苦手意識を抱いており、生徒のパフォーマンス力は全体的に低調である。この原因には、自分の考えや気持ちを伝えるための「話すこと」に関する言語活動が十分にされてこなかったため、満足のいくパフォーマンスができないという技能的な側面と、本校には多様な地域の小学校出身者が多いことから、人間関係が浅くなりがちなため、安心して自分の考えや気持ちを表現できないという心理的な側面が考えられる。これらの課題を克服するための研究について論ずる。

本校では、生徒に上述したような技能面及び心理面における課題が見られるため、本校英語科は「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し、そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」をめざす生徒像とし、そのために、研究主題を「TBLTをベースにした発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動」と設定した。Task Based Language Teaching (以下、TBLT)をベースにする理由としては、この教育方法の下では「生徒が学習した語彙や表現等を実際に活用しながら到達目標に迫っていく中で言語の習得を目指す」ため、新学習指導要領に示されている「知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である」(p.7)という内容と通じるためである。その上で、年間を通し、発表型・やり取り型の2領域統合型言語活動を計画的に設け、特に「話すこと」に重点を置いた生徒のコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す。

また、静岡県英語教育改善プラン(2020)によると、静岡県の中学校英語教育は、令和元(2019)年度において「学習到達目標の整備状況」99%、「生徒の授業における言語活動の割合」81%、「パフォーマンステストの実施状況」年4回(スピーキング)年3回(ライティング)となっており、「英語を使って何ができるか」という評価基準に焦点を当てた教育活動が展開されていることがうかがえる。一方で、その具体的教育方法及び教育内容等は同調査からは明らかとなっていない。このため、本研究ではタスク(Task)という明確な課題を示し、生徒のパフォーマンス能力を向上させるためにどのような手立てを講じるのか、そしてどのように生徒のパフォーマンスを評価するのかについても言及することとする。

2 研究仮説

生徒にとって魅力的な発表型タスク活動を課し、発表からやり取りへと移行する言語活動を設定することで「話すこと」におけるコミュニケーションを図る資質・能力を育成することができるのではないかと仮定する。

今年度、本校英語科では「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し、そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」を、「コミュニケーションを図る資質・能力を備えた生徒」と捉え、授業改善を行っていく。

3 研究方法

(1) 発表型タスクの充実

「取り組んでみたい」「自分の思いを伝えたい」「友達に聴いてもらいたい」と、生徒の意欲が向上するような発表型タスクを、各学年において年間を通して複数回ずつ設定する。その際、ルーブリックを活用しながら、生徒のパフォーマンス力が向上するように指導していく。

(2) 発表隊形の工夫

全体発表、グループ発表、ブース発表など、タスクの内容に応じた発表隊形を用いる。

(3) 帯活動によるスモールトークの実施

発表後に即興的なやり取りが自然に行えるよう、帯活動としてスモールトークを実施し、生徒の質疑応答をする力を高める。

4 研究経過

(1) 発表型タスクの充実

① 第1学年授業実践

Task	自分の好きなチームやグループ、家族について紹介しよう
単元目標	簡単な語句や文を用いて、自分の好きなチームやグループ、家族について即興で話すことができる。 【話すこと(発表)】-ア

本項では『Total English 1』Lesson 6 Junior High School in the U.S.における取組について述べる。本単元において生徒は「主語が三人称複数の場合の文の構造」「疑問詞 where の用法」そして「目的格の人称代名詞 him 及び her の用法」を学ぶ。英語を学ぶ中学生にとって、主語の種類によって動詞の形が異なることは、日本語にはないルールであり、動詞の形を適切に変化させながら英語をアウトプットすることは容易ではない。前単元では、生徒は主語が三人称単数の場合の動詞の変化について学び、動詞の語尾に“-s”や“-es”を付けるといった変化の方法を学んだ。一方、本単元では主語が複数の場合の動詞の形に着目する必要があるが、この場合、動詞は変化しないため、生徒にとっては混乱を招く可能性がある。よって、主語が複数の場合の動詞の形を適切に理解し、アウトプットできる力を生徒に身に付けさせたいと考えた。さらに、紹介するグループやチームの中で特定の一人に焦点を当て、その人物について紹介することも許可した。これにより、主語が複数の場合と単数の場合の文をアウトプットする必要性が生まれ、動詞の変化にもさらに気を配る必要性が出てくることから、動詞の変化に関する思考力、判断力が働き、動詞を正しく変化させることへの定着が進むと考えた。



生徒の実際の活動の様子であるが、自分のお気に入りの音楽グループ、スポーツチーム、家族、それにアニメキャラクターなどを「友達に紹介したい」「皆に知ってもらいたい」という思いに駆られ、大変意欲的に活動に取り組んだ。単元末の発表に向け、生徒は、伝えたい内容を kind (親切である) や live in Tokyo (東京在住) といったキーワードやキーフレーズで書き出し、英文を書き表さずに、頭の中で英文をイメージし、イメージしたことを口頭で表出する練習を繰り返して行った。図 1 は生徒が用いたワークシートである。

発表方法は、生徒全員が順番に一人ずつ教室の前面に立つて行く。発表者以外の生徒は、発表者の生徒を囲むように着席をする。それぞれの生徒が発表を終えた後、30 秒間の質疑応答の時間を取り、発表者と聞き手の生徒が自由にインタラク션을行う。新型コロナウイルス感染防止上、あまり生徒同士が密接にならないことに配慮しつつ、発表者と聴衆の距離を縮めることで、より興味をもって発表を聴き、質問がしやすくなる傾向にあるためである。質疑応答の場面では、発表内容から得られなかった情報を聞き出そうと、既習表現を駆使し、発表者に質問する生徒の姿が見られた。この場面におけるインタラク션は全て即興性が求められるやり取りであり、これまで積み上げてきた知識・技能がまさに生きて働く場面である。当然、生徒が発する英語にはエラーが見られたが、間違いを恐れずに、安心して英語でやり取りをしようとする姿が多く見られた。一人の発表者に対し、平均 5 名程度、多い時には 10 名程度の質問者がいた。下に示すのは、生徒が行った実際の発表と、その後に行われたインタラク션のスク립トの一例である。サッカーに関する発表の後、それに関連したやり取りが行われていることが分かる。

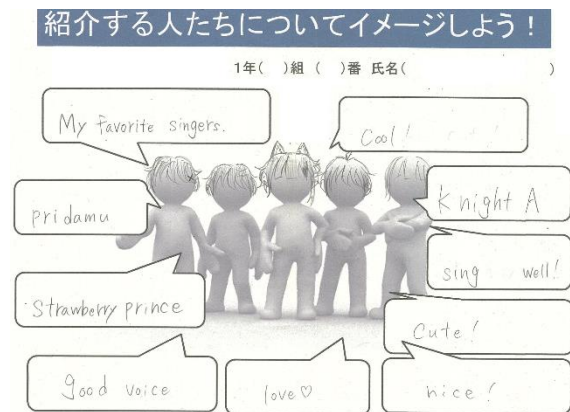


図 1 生徒が作成した発表内容のイメージ

(生徒 A による発表)

Hello, everyone.
 They are Bayern members.
 They are soccer players.
 This is Neuer.
 Do you know Neuer?
 Neuer is (a) very very very good soccer player.
 They are Europe champions.
 Their stadium is Allianz Arena.
 Allianz Arena is very very beautiful.
 They play soccer in Bundesliga.

Thank you.
 Do you have any questions?

(30 秒間の質疑応答)

B: What member do you like? (Who are your favorite players?)
 A: I like Neuer and Lewandowski.
 B: Sorry, I don't know.
 C: Do you like Courtois?
 A: So so.
 D: Do you like Barcelona or Jubilo?
 A: I like S-pulse, but I don't like Jubilo.

単元末に行った質問紙調査 (5 件法) によると、91%の生徒が「タスクに意欲的に取り組んだ」(否定率 0%, 平均値 4.6), 90%の生徒が「タスクに取り組むことで話す力が向上したと感じる」(否定率 1%, 平均値 4.5) と回答した。さらに、下に示すように、生徒の自由記述にはスピーチに関するだけでなく、言語材料に関する内容も見られ、タスクという活用を通して、基本的な知識・技能を獲得していったと捉えることができる。

質問紙調査における生徒の自由記述

- 複数の人の紹介をすることで「they」を効果的に使えるようになりました。スピーチが楽しかったです。
- 複数の人物を紹介するときに、動詞に「-s」や「-es」をつけないように気を付けました。
- これまでのスピーチの時よりも、皆のほうを向いて話すことを心掛けました。「They」が主語のときの be 動詞や一般動詞の形を理解することができた。

また、生徒のスピーチは図 2 の評価シートを用いて評価した。しかし、新学習指導要領の下では、生徒のパフォーマンスから「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう態度」の 3 観点を評価することが求められるため、この評価シートを改善する必要性を感じた。

評価のポイント【話す力(表現力)】

Evaluation Item	SCORE			
強勢、イントネーション、区切りなどに気を付け正しく発音できているか。	4	3	2	1
自分の考えや気持ち、事実などが伝わるように、適切な声の大きさと話したり、大切な部分は強調したり、繰り返したり、ゆっくり話したり、間を置いたりするなど、話すスピードを工夫をしているか。	4	3	2	1
原稿を見ずに、顔を上げて、聞き手とアイコンタクトを取りながら話しているか。	4	3	2	1
正しい表現(文法、語彙、語順)を用いているか。	4	3	2	1
文章理解を助けるような絵や写真を提示したり、ジェスチャーなどをしているか。	4	3	2	1
	Total			

4 Excellent, 3 Good, 2 Fair, 1 Good luck next time

図 2 第 1 学年 L6 スピーチ評価シート

②第2学年授業実践

Task	旅行代理店の社員としておすすめの旅行プランを紹介しよう
単元目標	自分の経験をもとに旅行を企画し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容で説明したり、相手からの質問に答えたりすることができる。 【話すこと（発表）】 - イ

本項では『Total English 2』Chapter 2 Project「旅行の計画を立てよう」における取組について述べる。本単元では、生徒が自分の旅行計画を作り発表することが一般的な言語活動だと思われる。しかし、発表からその後のインタラクションへとつなげるためには、聞き手の生徒に、より興味をもって発表を聴いてもらいたいと考え「旅行代理店の社員としておすすめの旅行プランを紹介する」というタスクを設定し、生徒を言語活動に取り組みさせた。目標は「自分の経験をもとに旅行を企画し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容で説明したり、相手からの質問に答えたりすることができる」である。生徒は第1時に、自分が友達に勧めたい観光地について整理し、第2時から第3時にかけて、整理した観光地の魅力を伝えるための内容を考えた。第5時の発表に向け、第4時には4人組の学習班で発表に向けた練習を行った。生徒はタブレットを用いて互いのスピーチを撮影し、自分のスピーチの様子を客観的に振り返りながらスピーチ力の向上に努めた。また、発表には聴衆の関心を引き付けるための資料が必要となる。今年度は新型コロナウイルスの影響で授業時数が大幅に削減されているため、授業時間内に資料の準備時間を十分確保できない。そのため、資料は家庭で作成することとし、紙媒体や実物を用いる方法とプレゼンソフトを用いる方法の2つを紹介した。後者を用いる場合、家庭のPCを用いて作成し、作成した資料をGoogle Classroomを通し、

教員に提出することとした。全体の3分の2程度の生徒が、この方法で資料を提出し、当日の発表を行った。実現間近な一人1台パソコンによって、さらにこのような取組が容易になるのではないかと期待感を抱いた。図3は生徒が実際に作成したスライド資料である。



図3 生徒作成のスライド資料（抜粋）

実際の発表では、特別教室を用い、1クラスを3グループに分け、1グループ10人強の集団で発表を行った。発表者に対する聞き手の数が少なくなるため、クラス全体で発表する際よりも、リラックスした雰囲気、かつ「やり取り」がより意識される発表となった。事後の質問紙調査（5件法）によると半数以上の生徒が、発表者に対し「積極的に質問することができた」と回答し、約3割の生徒が5回以上質問を試みたことが明らかとなった。中には、ほぼ全員の発表者に対し質問を試みた生徒もいた。また、同質問紙調査によると、95%の生徒が「タスクに意欲的に取り組むことができた」（否定率0%、平均値4.7）、87%の生徒が「タスクに取り組むことで話す力が向上したと感じる」（否定率5%、平均値4.3）と回答した。自由記述には「相手にとって分かりやすく、聴いていて楽

2nd year C2P TASK Evaluation			
【評価規準】			年 組 番 氏 名
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	<ul style="list-style-type: none"> 助動詞willを含んだ文の用法を理解している。 おすすめの旅行プランを紹介する技能を身に付けている。 	おすすめの旅行プランについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。	おすすめの旅行プランについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を、聞き手に配慮しながら話そうとしている。
【評価基準】			
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	誤りのない正しい英文で話すことができる。	絵や写真を効果的に用いながら、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容を話すことができる。	絵や写真を効果的に用いながら、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容を、聞き手に配慮しながら話そうとしている。
b	誤りが一部あるが、理解に支障がない程度の英文を用いて話すことができる。	絵や写真を用いながら、事実や自分の考えなどを整理し、話すことができる。	絵や写真を用いながら、事実や自分の考えなどを整理し、話そうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。
評価			
①C2P Taskに意欲的に取り組むことができた。【5 4 3 2 1】 ②C2P Taskに取り組むことで話す力が向上したと感じる。【5 4 3 2 1】 ③C2P Taskに取り組むでの感想			

図4 第2学年C2Pルーブリック

しい発表となるように工夫した」「前回のタスクと関連付けながら取り組むことができた。実用的な表現が多かったため、これから使う機会が多いと思う。今回のタスクを忘れないでおきたい」「もっと原稿を見ないで済むように、使える表現を増やさなければならない。そのために日常生活の中で、もっと積極的に英語とかかわっていったらと思う」など、前向きな意見が大多数を占めた。本単元で設定したタスクに対して多くの生徒が意欲をもって取り組み、かつ英語を話す力が向上したと感じていると捉えることができる。

なお、生徒のパフォーマンス評価は図4を用いて行った。このルーブリックは『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所）を参考に作成したが、生徒の音声面に関する技能を適切に評価するには、改善が必要だと感じた。



③第3学年授業実践

Task	島附クラウドファンディングで、自分が考えた新しいアイデアを提案し、支援金を集めよう。
単元目標	日常にある問題や不便さを解決する自分のオリジナルのアイデアについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができる。 【話すこと（やりとり）】-イ

本項では『Total English 3』Lesson 6「Interesting Languages」における取組について述べる。本校では総合的学習の時間において Enageed（以下、エナジード）という教材を用いて、日常にある問題点や不便さに疑問をもち、さらにそれらに対する解決策を生み出す活動を行っている。生徒はアイデアを考えることに非常に関心が高く、様々なアイデア生み出す力がある。一方で、実現できないことにより、中には非現実感を抱いている生徒もいる。そこで、この課題を克服するために、本単元では、エナジードで身に着けた日常にある問題点と、それを解決するためのアイデアを、クラウドファンディングで

提案し、支援者から実現するための支援金を集めるという言語活動を行った。

問題提起とアイデアの提案となると、スピーチ形式の発表型タスクが一般的に行われていると思われるが、一方的に提案するのではなく、発表者と聞き手がインタラクションしながらの双方向のコミュニケーションにしたいと考え、スピーチはCM形式の30秒間に限定し、その後3分間の質疑応答を行うとした。スピーチを30秒にすることで情報が制限され、聞き手としては質問する余地が残され、話し手としては質問をきっかけに、自分の考えをもっと話したいという気持ちが生まれるのではないかと仮定したためである。単なる1問1答で終わるのではなく、聞き手が意見を述べたり、話し手の答えが2文3文と続いたりするなどの、発展的なやり取りを期待できるのではないかと考えた。

以下は単元の流れである。生徒はまず、最初の3時間で、本単元で扱われる言語材料（目的格の関係代名詞” which” ” that” 及びその省略）を含む文の構造について学習した。第4時には自分の考えをまとめ、即興的に友人に自分の考えを伝える活動を行った。第5、6時には実際にCMに必要な資料を準備、修正した。この間、ペアでの練習、相互アドバイスの時間を設けた。生徒はiPadで互いの話す様子を撮影し合い、自分自身で自分のCMにおける発話内容や話し方を振り返ることで、話す力の向上を図った。



発表本番は、特別教室を用い、1クラスを6グループに分け、1グループ6人の集団で行った。発表者に対する聞き手の人数が少ないため、発表者はよりリラックスし、聞き手はより積極的に質問しようとする姿が見られた。また、教師が任意の生徒の表れをiPadで撮影し、発表の合間にスクリーンに映し出し全体で共有した。特に、単なる質問ではなく、発表者のアイデアに対する自分の考えを述べたり、アイデアの問題点を指摘する「聞き手の姿勢」や、自分から追加の意見を出し、聞き手に意見を求めたりする「話し手の姿勢」を紹介すると、それが他のグループでも見られるようになった。これにより質の高いやり取りが実現できたと考える。



グループ内全員の発表後には、「実現してもらいたい」と思えるアイデアを紹介した生徒に対し、支援金を渡す活動を行った。生徒は、仮想通貨である「SHINOMIYA ドル」を五千ドル（千ドル紙幣5枚分）ずつ所持し、支援する人数や金額等の決定権を与えられた。また、紙幣の裏には発表者のアイデアや発表の様子に関するコメントを記入することとしたため、熱心に記入する生徒の姿が見られた。発表者はコメント付きの支援金が集まると嬉しそうな表情浮かべていた。



事後の質問紙調査によると、91%の生徒が「タスクに意欲的に取り組むことができた」（否定率0%、平均値4.7）、100%の生徒が「タスクに取り組むことで即興的に質問したり、答えたりする力が向上したと感じる」（平均値4.6）と回答した。また、半数以上の生徒が「積極的に質問することができた」と回答した。自由記述には「インタビューの祭の質問に以前よりも良く答えられ、自分の伝えたいことを伝えられた」「質問されたときに効果的にスライドを使うことができ、とっさの質問にも答えられた」「質問者として質問の前に自分の意見を加え、話をひろげることができた」など、前向きな意見が大多数を占めた。本単元で設定したタスクに対して多くの生徒が意欲をもって取り組み、かつ英語を話す力が向上したと感じていると捉えることができる。

また、本番を迎えるまでに資料を作成だけではなく、ペアで練習をし、iPadで撮影した動画で振り返ったり、ペアで互いにアドバイスをし合ったりする活動については94%の生徒が「友達からのアドバイスが参考になった」、82%の生徒が「iPadで撮影した自分の姿は次回に向けて参考になった」と答えている。このことから、即興的なやり取りをするパフォーマンス課題を課すにあたって、今年度の本校英語科で目指す姿

【評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<知識> 関係代名詞の目的格whichやthat及び省略の文構造を理解している。 <技能> 日常にある問題や不便さとそれを解決するオリジナルのアイデアについて事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、関係代名詞などの語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。	クラウドファンディングで支援者に実現したいと思ってもらえるように、日常にある問題や不便さと自分のアイデアの良さについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしている。	クラウドファンディングで支援者に実現したいと思ってもらえるように、日常にある問題や不便さと自分のアイデアの良さについて、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりしようとしている。

【評価基準】

条件1：日常にある問題や不便さとそれを解決する自分のアイデアについて根拠をもとに、端的に述べている。
 条件2：相手の質問を理解した上で、自分の考えを適切に述べている。
 条件3：やり取りの場面において、自分の意見について、更に1、2文の情報を付け加え、話題を広げたり深めたりしながら対話を継続している。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声を押さえながら、誤りのない正しい英文で話すことができる。	3つの条件を満たしている。	相手に配慮しながら3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
b	誤りが一部あるが、理解に支障がない程度の音声や英文を用いて話すことができる。	2つの条件を満たしている	相手に聞きやすい声量や速さで話すこと等を多少なりとも意識しながら3つの条件を満たしてやり取りしようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

図5 第3学年L6ルーブリック

である「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し、そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」の実現に向けて、個人の完成度を高める時間を適切な量と方法で設定することが必要だと感じた。

本番の隊形についても、88%の生徒が「話し手として6人班での発表は全体発表より話しやすかった。」と答え、91%の生徒が「聞き手として6人班での発表は全体発表より質問しやすかった。」と答えている。全体での発表は、それに慣れていなければ、日本語でも緊張が生まれ、本来もっているパフォーマンスを十分に引き出せない可能性がある。少しでも緊張感を取り除き、生徒間のインタラクションを活性化させるためには、隊形の工夫が有効な手段だと感じる。



一方で、38%の生徒が「聞き手の質問が理解できないことがあった」と答えた。生徒の表れからも、即興的にやり取りをする中で、意思疎通ができていない場面が多く見られ、生徒が話す英語の正確性を向上させる点には課題が残った。なお、生徒のパフォーマンス評価は図5を用いて行った。

(1) 発表隊形の工夫

全体発表、グループ発表、ブース発表など、タスクの内容に応じて様々な隊形で発表を行ってきた。上述した1年生の取組のように、全体発表は発表者を囲むように聞き手が着席して発表を聴く。発表者との距離が近くなる分、情報を捉えやすく、また質問を行い易くなる。これにより、上述した1年生の実践のように活発なやり取りが見られた。また、2年生の実践で紹介したように、1クラスを3つの集団に分け、ブースセッションによる発表も実施した。さらに、別の单元では、教室をレストラン風にデコレーションしたり、特別教室を討論会場にセッティングしたりするなど、タスクに合わせ隊形を変更した。これにより、生徒が「発表」から「やり取り」へより移行し易くなると感じた。



(2) 帯活動によるスモールトークの実施

生徒が普段母語で会話をするように、自然に英語で対話ができることを目指し、年間を通じて帯活動（本校ではモジュール学習と呼んでいる）でスモールトークを実施している。表1はその手順を示している。主な活動はもちろんスモールトーク（話す・聞く）であるが、対話したことを書き表す活動や友達の書いた文を読む活動が含まれており、4技能の力を向上させる取組となっている。梅田（2017）の研究同様、この取組により、生徒の話す力や書く力は確実に向上していると捉えている。

表1 スモールトークの流れ

内容	時間配分
① 本時のテーマ紹介	1分
② Intake Reading	3分
③ ターゲット文の確認	2分
④ 1分間対話活動（スモールトーク）	1分
⑤ Writing（対話の書き起こし）	5分
⑥ Check（ペアの英作文を確認）	1分
⑦ まとめ	2分

年間を通じて実施している様々なタスク活動における事後の質問紙調査の自由記述には「普段行っているモジュール（でのスモールトーク）をいかすことができた」という感想がたびたび見られ、また反対に「今回学んだ表現をモジュールでも意識していきたい」という意見も見られた。つまり、生徒はタスクにおけるやり取りとモジュールで行うスモールトークの内容を往還しながら、即興的に話すことの力を高めようとしていることが、これらの感想から読み取ることができる。下に示した英語は1年生のスモールトークで生徒が実際に話した内容のスク립トを示している。提示された写真の人物に関するやり取りである。人称代名詞の活用には課題が見られるが、話題を変えながら、自然なやり取りを行っているといえる。また、図6は2年生が書いた実際のスク립トである。既習表現を活用しながら、豊かな内容の対話を行っている様子うかがうことができる。

A: Who's she?

B: She's Ms. Sawamura.

Ms. Sawamura is my science teacher.

A: Do you like science?

B: So so. Do you like science?

A: So so.

B: Do you like Ms. Sawamura?

A: Yes, I do. How about you?

B: Me, too.

A: What subject do you like?

B: I like math.

対話内容の振り書き①(ペアで確認)②(20秒以上を交換し合い) ※分からない英語はローマ字や日本語で書いてもらってもかまいません	対話時間 6分 秒
今日のペア()さん N: How did Mr. Sugiyama look this morning? Y: I didn't see Mr. Sugiyama. But I think : he looked funny. N: OK. Y: How did Mr. Sugiyama look this morning? N: I didn't see Mr. Sugiyama. Yesterday. : he looked happy. : Do you like him? Y: Yes, I do! N: Me, too. He is kind and funny.	※この「学ぶ姿」を撮影した 「あ、これはどうですか?」 と聞く時 How about you? が使えなくて も、名前や時間を省 略して「言わなくて きるんではないかと 思ふ」。
	学習者の自己評価 ①アドバイスの達成度 1・2・3・4・5 ②自分たちの対話の満足度 1・2・3・4・5

図6 スモールトークの SCRIPT

5 成果と課題

今年度「安心して英語で自分の気持ちや考えを発表し、そこから発表者と聞き手が発表内容に関して活発なやり取りを行うことができる生徒」の育成を目指し、授業改善に取り組んだ。上述したように、生徒は「発表型」と「やり取り型」の2領域統合型の言語活動に意欲的に取り組み、さらに「話すこと」に関する英語力の向上を実感している。第2学年104名の生徒を対象に行った質問紙調査によると86%の生徒が「今年度タスクに取り組んでいることで、昨年度(1年生の時)より英語を「話すこと」に対し、抵抗感が減ったと感じる」(否定率5%, 平均値4.3)と回答した。また、実際のパフォーマンス力は、教員がルーブリックに基づいた評価を行い、生徒にフィードバックを返しているため、生徒は自分のパフォーマンス力を客観的に確認することができる。これにより、自己のパフォーマンス力を省察し、次のタスクに向け新たな課題をもちながら取り組んでいる。使用する言語材料の難易度が上がる中で、パフォーマンスの評価が向上する生徒も少なくない。このことから、タスクベースの

2領域統合型言語活動は、生徒の英語を学ぶ意欲及びコミュニケーションを図る資質・能力を向上させる上で効果的であるといえる。

今後の課題は、次年度新たに採択される教科書の題材や新たに加わる言語材料に対応したタスクの設定および、生徒のパフォーマンス力を適切に測るルーブリックの作成を進めることである。図7は本稿で紹介した実践以降のタスク用に作成したルーブリックである。また「発表型」「やり取り型」の話すことに関する技能のみならず、他の3技能に関しても、生徒の力を向上させられるためのタスクを現行のものをリデザインして再構築する必要がある。本校の生徒が抱える課題、そして新しい時代を生きていくために必要な資質・能力を、英語教育の側面から捉え、新学習指導要領の全面実施に向け、さらなる授業改善に取り組んでいきたい。

〈参考文献〉

文部科学省(2013)「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
文部科学省(2015)「生徒の英語力向上推進プラン」
文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 外国語編』
文部科学省(2020)「令和元年度『英語教育実施状況調査』概要」
梅田 晃(2017)『中学生を対象とした「聞くこと」「話すこと」に関する英語モジュール学習の実践的研究』静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻
国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 外国語】』東洋館出版
静岡県教育委員会(2020)「静岡県英語教育改善プラン」

1st year L7 TASK Evaluation

【評価規準】	年 組 番 氏 名	
知識・技能 ・助動詞canを用いた文の特徴や決まりを理解している。 ・自分の長所について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、助動詞canなどの簡単な語句や文を用いて伝える技能を身に付けている。	思考・判断・表現 面接試験において、会社の社長に採用してもらえるように、自分の長所について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。	主体的に学習に取り組む態度 面接試験において、会社の社長に採用してもらえるように、自分の長所について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を、相手に配慮しながら話そうとしている。
【評価基準】		
知識・技能 a 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声を押さえながら、誤りのない正しい英文で話すことができる。	思考・判断・表現 入社を希望する会社が求める人材像を意識しながら、自分の長所について事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。	主体的に学習に取り組む態度 事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を、絵や写真を効果的に用いたり、相手に聞きやすい声量や速さ、強弱などを意識するなど、相手に配慮しながら話そうとしている。
b 誤りが一部あるが、理解に支障がない程度の音声や英文を用いて話すことができる。	自分の長所について事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができる。	事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を、絵や写真を用いたり、相手に聞きやすい声量で話すことなどを意識しながら話そうとしている。
c 「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。
評価		
①L7 Task に意欲的に取り組むことができた。【5 4 3 2 1】 ②L7 Task に取り組むことで話す力が向上したと感じる。【5 4 3 2 1】 ③L7 Task に取り組んだ感想		

図7 第1学年L7ルーブリック